

# 卷頭言

## 経験と思考

### テキストトを解釈する子どもたち

鳥光美緒子

『チコときんいろのつばさ』（あすなる書房 二〇〇八年）という本を、読まれたことがあるでしょうか。

作者はレオ・レオーニ。翼のない鳥、チコの話です。ある時、魔法の鳥に出会ったチコは、長年の夢だった金色の翼をもらいます。興奮して空に駆け上るチコ。でも、翼のないチコには親切だった仲間の鳥たちは、金色の翼をもった彼には邪険です。「金色の翼をもったからって、自分のほうが偉いと思ってるんだろ」と、仲間たちはチコに言います。仲間外れにされたチコは群れを後にして、困っている人たちに出会い、その人たちに一枚ずつ、金色の羽毛を抜いて差し出します。すると金色の羽の後には、黒い羽が生えてきます。こうしてみんなと同じ黒い翼になったチコは再び群れに戻ります。すると今度は、鳥たちは彼のこと



を仲間として受け入れます。

レオ・レオーニの諸作品を一年間にわたって幼稚園クラスの子どもたちと共に読んだアメリカの幼稚園教師、ペイリー註さんの実践記録をサブテキストにして、大学院の授業で、院生たちと一緒に、レオーニの作品を読んでいるのですが、受講者の一人Aさんは、どうしてもこのチョコの話には納得がいかないと言います。

どうして仲間たちは、金色の翼をもったチョコを受け入れてあげないのか、みんなと同じじゃないと受け入れてくれないなんてひどいと憤慨します。

退職した小学校教師のBさんは、この物語をていねいに分析して、これはチョコの成長の物語なのだと言います。チョコは、たんに集団に戻ったのではなく、いろいろな人を助けることを通じて成長し、仲間たちの嫉妬心を理解し、それに配慮できるようになったのだと言います。

この物語で扱われている、個と集団の葛藤は、実際、幼稚園や保育園ではしばしば目にするものでしょう。そしてそれは、子どもたちの社会性の成長にとって不可欠の経験であるとも考えられているように思えます。子どもたちの社会性は、仲間関係の中で、わがままを通そうとした時にぶち当たる壁と痛みを知ること



で、学んでいくしかないものだと考えられているように思います。

この、個と集団との関係の問題について、まったく別のアプローチがあり得ることを、ペイリーさんの実践記録は示してくれます。つまり、テキストを、経験を振り返り思考する鏡として使うというアプローチです。

チコの物語や『フレデリック』『コーネリアス』等々を読んでもらい、演じ、絵に描くことを通して子どもたちはほしだいに、レオ・レオーニの物語に自分たちの抱える問題のエッセンスを見ようになります。個と集団にかかわる自分たちの悩みや葛藤を、レオ・レオーニの作品のさまざまな主人公たちに託して、語り、考えるようになっていきます。

経験し自ら痛みを知ること成長するという社会性の成長のあり方を、もちろん、ペイリーさんも否定するものではないでしょう。でもその直接経験という方法だけではなく、彼女のクラスの子どもたちは、自分の問題を物語上の人物の問題に照らして思考し、選択肢を模索し、判断するということをも学びます。

私自身はペイリーさんのこの方法に、強く惹きつけられるのを感じます。自分それは私が、教育の方法の問題を超えて広く日々の生活実践においても、知的に経験を振り返ることの価値を重視する傾向があるという個人的な好みに関連しているでしょう。



これを読んでくださっている幼児教育関係者の方たちは、社会性について考  
え、討議することを促すペイリーさんの方法をどう思われるのでしょうか。

ペイリーさんの実践記録を院生たちと読みながら、子どもたちにアンケートし  
てみたいという気分を駆られています。

ペイリーさんの本では、チコの物語を聞いた子どもたちは、ほとんど例外なく  
チコではなく仲間の鳥たちに荷担します。チコはわがままでということです。ペイ  
リーさん自身は、長年、本を書く教師であるという彼女自身の「個」が、教師仲  
間の間で受け入れられなかった経験を振り返りつつ、この子どもたちの答えに  
ショックを感じています。

ある程度自由に社会的移動をすることのできる大人と、社会的移動に関してお  
おむね大人に従うしかない幼児とでは、個と集団についての考え方について決定  
的な違いがあるのかもしれませんが。

これを読んでくださっている先生方のクラスの子どもたちだったら、どうチコ  
の物語を読むのでしょうか。  
(中央大学文学部教授)

注 Vivian G. Paley, "The Girl with the Brown Crayon". Harvard University Press.

1997.